ふるさと再発見
～幕末維新と徳地～

要塞のような徳地堀の陣構え

今回は徳地の堀地区へ駐屯した奇兵隊の陣構えについて話をします。

日々の生活をしていると、住んでいる徳地がそんなにすごいとは誰も思いません。しかし奇兵隊軍監の山縣有朋は、三田尻から転陣・駐屯する理由を次のように書いているのです。

「屯陣の地形を案ずるに三田尻は・・・諸人の注目を惹くの恐れあり、之に反して徳地は山間に位するも兵を国境に出すに於いて又山口に往来するに於いて両ながら其便ある」(陣を置く地形を考えると、三田尻は多くの人々の注目を浴びることとなる。これに反して、徳地は山間部にあって、兵を石見の国境に出しても山口に行くにも大変便利がよい。)(「懐旧記事」より)

飛行ロボット「ドローン」の眼になったつもりで検証してみましょう。二の宮神社前の二の宮大橋から堀方面を見ます。遠くに中国山地がかすんで見えます。「ドローン」の機体をさらに上げます。佐波川と島地川の合流付近を頭にして八坂・柚野方向をしっぽに喩えてみると、堀地区の平地がお腹のくびれた「おたまじゃくし」の形に見えてきます。

金徳寺からの眺望

第一次長州征伐の決定直後、数万人の幕府軍が三田尻方面から攻め込んで来ることを想定して、山縣有朋は徳地で戦うことを決めました。「おたまじゃくし」の頭の部分を防府方面から見ると、両側から山が大きくせり出して庄方の金徳寺(第三銃隊)、須路の宗徳寺(狙撃隊)、伏野の正福寺(膺懲隊)を山陰に隠します。しかも本陣の正慶院を含む小古祖方面の4隊は、平地の途中のせり出す山(くびれ部分)に隠れて見えません。しかし、現消防署の上辺りに陣取る澄月院(第一銃隊)からは、堀地区全域が見わたせ、三田尻から入ってくる幕府軍の動きは丸見えとなります。

澄月院からの眺望

山や川などの地形を巧みに利用して、幕府軍と戦おうとした奇兵隊の陣構えはすごいとしか言えません。今一度、徳地の地形を見直して、幕末へタイムスリップをしてみませんか。

(徳地幕末維新歴史放談の会　代表　山田 文雄)